

新春の哀傷

一

『源氏物語』には、作中人物が亡くなった翌年の春、正月に、残された人々の悲しみを描く場面―「新春の哀傷」とでも呼ぶべき場面―が幾たびか繰り返して描かれている。具体的には、「葵」巻巻末、葵の上死去の翌年元日に、左大臣家を訪れた光源氏と、左大臣・大宮の葵の上哀傷の場面（②七七〜八・引用は小学館『新編日本古典全集』本により巻数・頁数を示す。以下も同じ。）、紫の上を失った光源氏が、哀傷の一年を送る「幻」巻冒頭、一月の場面（④五二一〜八）、宇治八の宮が薨去した翌年正月に、大君と中の君が悲しみを深める場面（⑤二二〜三）、大君没後の正月を迎えた中の君の悲嘆を描く「早蕨」巻冒頭の場面（⑤三四五〜七）、の四つの場面を「源氏物語」「新春の哀傷」の場面、と呼ぶことにしたい。

『源氏物語』には他に、春に哀傷する場面として、藤壺が崩御した春三月、悲嘆に暮れる光源氏を描いた「薄雲」巻の場面（②四四七〜八）、柏木没後の桜の季節に、弔問に訪れた夕霧と一条御息所が柏木を偲ぶ贈答をする場面（④三三三〜三）がある。藤壺と柏木を哀傷する場面は共通して「ふかくさの野辺の桜しこころあら

林 悠 子

ば今年ばかりはすみぞめにさけ」（古今・哀傷・八三一・上野寧雄¹⁾）が引用され、桜の季節のはなやかさと故人への哀悼の思いが対照されている。また、先に「新春の哀傷」の例として挙げた「早蕨」巻の正月に続いて、匂宮に引き取られ都に移される中の君が、薫や女房たちと大君を哀惜する場面（⑤三三三〜七）があるのであるが、この場面については、少し詳しく述べておきたい。中の君の都移りは「二月の朔日ごろ」（⑤三五二）の出来事とされ、薫と中の君が大君を偲ぶ場面は、その前日のこととして設定されている（「みづから（＝薫）は、（中君ガ）渡りたまはむこと明日とての、まだつとめておはしたり」（⑤三五三）。もし、「二月の朔日ごろ」が、二月一日その日を指す可能性があるのであれば、薫と中の君の対面は、その前日、一月の晦日になることも考えられ、本稿が定義するところの「新春の哀傷」にあたる可能性があるのである。しかし、この場面が「新春の哀傷」である蓋然性はきわめて低いと思われる。というのも、平安期の用例を見る限り、「一日」その日を表す場合は「朔日」「朔日の日」と表現される場合が多く、また「朔日ごろ」「朔日のころ」と表現される例の中で、実際の日にちが分かる例を見ても、「一日」であることはないからである。「朔日ごろ」「朔日のころ」

は、厳密にいえば「一日」を除く月初めの数日を表す語であると考えられる。

今このようにして、「春の哀傷」と「新春の哀傷」を区別しようと試みるのは、広義の「春の哀傷」（新春の哀傷も含めた）が、七回あるうち、四回までもが「新春の哀傷」である、というその回数多さもさることながら、四十九日・一周忌など死者追悼の儀式によって刻まれる時間とは別に、世俗の時間である正月が、死者を追悼する重要な契機として描かれていると考えられるからである。また、「新春の哀傷」の場面は、儀礼的な哀傷歌の贈答ではなく、大切な人を失った作中人物の痛切な心情を描き出しており、読者にも強い印象を残している。正月にあえて哀傷することには、なにがしかの意義があったのだと思われる。それゆえに「新春の哀傷」の場面は、「春の哀傷」のそれと重なり合う要素を有しながら、「新春の哀傷」独自の悲しみの描き方を獲得していると思われる。次節には、物語の「新春の哀傷」の場面を具体的に検討したい。

二

四つの「新春の哀傷」の場面を概観してまず言えるのは、一年の中で最もはなやいだ時間として経験されるはずの年のはじめに、前年に亡くなった人をもつて悲嘆に暮れずにはいられず、そのことがより一層悲しみを強調する、というのが「新春の哀傷」の基本的な悲しみの描かれ方だということである。その上で、具体的な描かれ方の特徴としては、1年が改まっても悲しみは改まらない、変化することがない、ということが強調して述べられること、がまず挙げられる。「葵」巻で大宮が源氏に贈った「新しき年ともいはずふる

ものはふりぬる人の涙なりけり」は「新しき年」の「新」と「古」を対照させ、新年を迎えたにも関わらず「降る」涙を詠むことで、年が明けても変わらぬ悲しい心情を訴えた歌である。また「幻」巻冒頭に描かれる光源氏の悲しみ「春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、（源ノ）御心ひとつは悲しさの改まるべくもあらぬに：」（④五二一）、や「早蕨」巻、中の君が伝え聞いた薫の様子「（薫ガ）尽きせず思ひほれたまひて、新しき年とも言はずいやめになむなりたまへると（中君ガ）聞きたまひても：」（⑤三四七）もこれに相当する。

次に指摘できるのが、Ⅱ正月を迎えたよろこびを共有しようとする周囲と、そこから疎外されて悲しみにくれる作中人物の姿を描くこと、である。正月の挨拶に来た人々への対応を拒む「幻」巻の光源氏の姿「外には例のやうに人々参りたまひなどすれど、御心地なやましきさまにもてなしたまひて、御簾の内にのみおはします」（④五二一）や、「榎本」巻で阿闍梨から新年の挨拶と共に贈られた芹・蕨を見て、新年を迎えたことが実感され喜ばしい（「所につけては、かかる草木のけしきに從ひて、行きかふ月日のしるしも見ゆるこそをかしけれ」（⑤二二三）という女房たちに対して、「何のをかしきならむ」（同）と強い反発を感じる大君・中の君姉妹の心中などが、例として挙げられる。「榎本」巻の大君・中の君は、年の瀬にも「あはれ、年かはりなんとす。心細く悲しきことを、あらたまるべき春待ち出でてしがな」と「心を消たず」（氣を落とさず）言う女房に対して、「難きことかな」と思っていたのであった（⑤二〇四）。

また、Ⅲ正月の「こと忌み」が出来ないでいることについての言及にも注目したい。「こと忌み」は、「事忌み」「言忌み」の漢字が

当てられるように、特にめでたい時や、祝うべき時に、不吉な行動（しばしば涙を流すこと）をしたり、不吉な言葉を言ったりすることを忌んだ習慣を指すのであるが、『新春の哀傷』においては、晴れの日であるはずの正月に、悲しみのあまり「こと忌み」をすることが出来ない、ということが作中人物の悲しさを効果的に表す表現として使われている。「葵」巻では、「大臣（＝左大臣）、新しい年とも言はず、昔の御事ども聞こえ出でたまひて、さうさうしく悲しと思すに、いとど、かくさへ渡りたまへるにつけて、念じ返したまへどたへがたう思したり」（②七八）と左大臣の様子が描かれ、「今日はいみじく思ひたまへ忍ぶるを、かく渡りせたまへるになむ、なかなか」（同）と大宮から光源氏への消息が伝えられる。傍線部に見えるように、左大臣も大宮も正月の「こと忌み」を意識しながらも、こらえられない悲しさを吐露している。

見てきたⅠからⅢは、いずれにしても「おめでたいはずの正月の悲しみ」が基調となるために、重なり合う部分も多く、明瞭には分けられないところもある。例えば、「正月に流す涙」ついて言及しているのはⅢだけではなく、Ⅰにも「涙」への言及はあり、その点においては重なり合いが認められるのである。ただ、「正月に流す涙」をⅠのように「新しい年を迎えてもお悲しみは改まらないために流れる涙」と表現するのか、Ⅲのように、「新年には慎むべき涙であるのに耐えられない」と「こと忌み」の問題として表現するのか、は、物語が「新春の哀傷」をどのように形象し表現してきたかを考える上では、注目しておきたい差異であるように思われる。

さて、『源氏物語』以前、おそらく仮名散文はいまだ死をそれ自体独立した叙述の対象として持つには至らず、まして死の叙述の様

式など作りあげてはいなかった」と述べたのは、今西祐一郎氏であった。⁽³⁾氏の述べる通り、『源氏物語』以前の散文作品には、作中人物の死そのものを、残された人々が哀悼するまとまった場面が描かれることはなく、『源氏物語』が、残された者たちの悲しみをこれほどまでに豊かに描き得たのは、和歌の世界に哀傷歌の伝統が息づいていたからだと考えられる。本稿では、『源氏物語』成立以前に詠まれた「新春の哀傷歌」の系譜を辿り、その表現と発想についてまず考えたい。そのうえで、『源氏物語』と、先行する「新春の哀傷歌」の表現や発想の関わりについて考察を試みたい。もとより「新春の哀傷」の場面の和歌的な表現と発想は、先行する「新春の哀傷歌」にのみ支えられているのではなく、他の季節の哀傷歌や、哀傷以外の様々な部立からの引歌によつて織りなされているのであつて、「新春の哀傷歌」を考察することがそのまま『源氏物語』「新春の哀傷」の場面がいかに形作られたのかを説明することになるわけではない。しかし、先に見たような「新春の哀傷」が独自に持つ「哀傷」のあり方がいかに獲得されたのかを考える上で、物語に先行する「新春の哀傷歌」を概観することは有用であると思われる。次節では「新春の哀傷歌」を見ていきたい。

三

「新春の哀傷歌」はどのような発想と表現によつて詠まれてきたのだろうか。以下は、『源氏物語』成立以前からほぼ同時代までの「新春の哀傷歌」を管見の及ぶ範囲で掲出したものである。年代順に並べ、詠作事情および「新春の哀傷歌」としての特徴を簡単に記した。

〔二〕保明親王薨去（延長元年（九三三）三月）の翌正月

先坊うせたまひてのはる、大輔につかはしける

はるかみの朝臣のむすめ

①あらたまの年こえくらしつねもなきはつ鶯のねにぞなかるる

（後撰・一四〇六）

返し

大輔

ねにたててなぬ日はなし鶯の昔の春を思ひやりつつ

（同・一四〇六）

①は保明親王に侍したと思われる藤原玄上女が、保明の乳母であると考えられる大輔に贈った保明哀傷の歌である。鶯がやってくるように、新しい年がやってくるらしい、無常を嘆いて、鶯の初音のように声を出して泣かれることですよ、と新春の景物である「鶯の初音」と声に出して泣かれる「音」をかけた詠み方となっている。大輔の返歌は「初音」ではなく春の鶯一般を詠むことで、保明薨去の三月「昔の春」を思い返し続けている悲しさを歌っている。なお、『後撰集』には玄上女が「同じ年の秋」に保明を哀傷した歌（二四〇八）も残っている。

〔二〕醍醐天皇崩御（延長八年（九三〇）九月）の翌正月

先帝おはしまさで又の年の正月一日おくり侍りける

三条右大臣

②いたづらに今日や暮れなん新しき春の始は昔ながらに

（後撰・一三九六）

返し

③なく涙ふりにし年の衣手はあたらしきにもかはらざりけり

（同・一三九七）

②③は『三条右大臣集』にも見え（二九・三〇）、『兼輔集』にもやや形を変えて載る。醍醐天皇の外戚であることによって一時的に勢力を得た三条右大臣藤原実方にとって（実方の同母姉妹が醍醐母胤子）醍醐天皇の崩御は大きな政治的打撃であった。その定方と従兄弟であり婿である兼輔が交わした哀傷歌である。新春は変わらずにやってきたのに、昨年からの悲しみが続いているために、また、諒闇であるから新年の行事がないために、「いたづらに」日を暮らすむなしさを歌う定方に対して、兼輔は涙が「降る」とことと「古」をかけて、年が改まっても涙が止まらなさと返している。醍醐崩御の悲嘆にくれる定方は、崩御の九月から葬送があった十月、翌年正月（当該贈答）、三月、と度々兼輔に悲しみを訴え、兼輔がそれに応じていることが『兼輔集』『三条右大臣集』から確認される。

〔三〕藤原兼輔薨去（承平三年（九三三）二月）の翌正月

おなじ中納言うせたまへる年の又の年のついたちの日、かの
中納言の家になてまつりける

④藤衣あたらしくたつ年なればふりにし人はなほや恋しき

（貫之集・七九三）

藤原兼輔と親しく交流した貫之が詠んだ兼輔哀傷歌である。兼輔薨去時には、貫之は土佐に赴任中であった（帰京は承平五年二月）。衣を「裁つ」と年が「立つ」が掛けられ、新年を迎えて旧年に亡くなった「古りにし人」がなお一層恋しいと歌う。「新」と「古」を対照させ、年が改まることによって、故人が「古りにし人」となってしまう嘆きを歌う点、注目されよう。

〔四〕 重明親王薨去（天曆八年（九五四）九月）の翌正月

ちち宮うせたまひて、正月一日に

⑤ 忌むなれど今日しもものかなしきは年をへだつと思ふなりけり

（斎宮女御集・四四）

重明親王女で、村上天皇女御である斎宮女御徽子が、重明薨去の翌年正月に詠んだ歌である。⁶ 当該歌は、「こと忌み」を破ることそのことを題材とし、亡き人を追慕する正月の悲しさが詠まれた最初の例であると思われ、注目すべき一首である。また、下の句では新年を迎え「年をへだつ」ことで旧年に亡くなった故人との距離が遠くなることの悲しみを歌っている。

〔五〕 藤原穩子崩御（天曆八年（九五四）一月）の翌正月

天曆御時、故後のみやの御賀せさせたまはむとて侍りけるを、

宮うせ給ひにければ、やがてそのまま、まうけして御諷誦お

こなはせ給ひける時

御製

⑥ いっしかと君にと思ひし若菜をば法の道にぞ今日はつみつる

（拾遺集・一三三八）

天曆八年正月四日に穩子が崩御し、翌年同日に村上天皇宸筆の法華經を供養した法華八講が行われた（『扶桑略記』『村上御記』等）。

当該歌はその際に詠まれた歌だろう。法華八講の際の詠なので「法華經をわがえし事はたき木こりなつみ水汲みつかへてぞえし」（拾遺・一三四六）が踏まえられている。穩子の長寿を祈って摘むはずだった若菜を、追善供養のために摘むことになったという嘆きの歌である。正月の景物である若菜を、「なつみ水汲み」の菜として詠

んでいる。なお、詞書は穩子の算賀の準備をしていた矢先に穩子崩御があり、賀の準備を追善法要の準備に移して法要を行ったという事情を伝えている。

〔六〕 敦道親王薨去（寛弘四年（一〇〇七）十月）の翌年正月か

一日、人の許に

⑦ きく人やいはばゆゆしとおもふとてかすむ雲をみにのみぞみる

（和泉式部統集・四二）

七日、雪のいみじう降るに、つれづれとおぼゆれば

⑧ 君がためわかなつむとて春日野の雪まをいかにけふはわけまし

（同・四四）

正月一日、人人の事いみしてものいふをききて

⑨ きく人の忌めばかけてもいはおもふ心のうちはけふもわすれず

（同・九〇）

七日

⑩ 思ひきや今日の若菜も知らずしてしのぶの草をつまんものとは

（九二）

子日のまつを人のもてきたるを見て

⑪ 手もふれでみにのみぞみる万代をまづひきかけし君しなければ

（九二）

いわゆる「帥宮挽歌群」の中に収められた五首である。帥宮薨去後から、ほぼ時間の経過に従って掲載される和歌群の中で、四九日の直後におかれる⑦⑧、一周忌の直後におかれる⑨⑩共にややわかりにくい場所に位置している。そのためこれらが、敦道親王薨去

後の翌正月の詠なのか、また⑦⑧、⑨⑩が同年に詠まれたものか、明確ではないが、薨去の翌年寛弘五年正月に詠まれたものであると考えるのが最も自然だろう。一日の詠である⑦・⑨は両方とも「こと忌み」を破ることを題材としている。⑧⑩は若菜を詠み込み、宮が在世中であつたのなら自分は熱心に若菜を摘んだだろうに、という悲嘆を詠み、⑩は子の日の松を詠み、宮の短命を嘆く。

〔参考〕藤原能子卒去（康保元年（九六四）四月）の翌正月

康保二年正月、忠君来小野宮、是貞信公御愛孫也、仍以大徳
勸盃酒、其次有此詞

あたらしき年のはじめと思へどもとまらぬものは涙なりけり

（清慎公集・九九）

詞書・和歌本文からだけでは、必ずしも哀傷の要素を認めがたく、「新春の哀傷歌」に数えて良いのか、やや問題が残る一首であるため、参考として掲げた。この歌が詠まれた前年、康保元年四月に実頼室能子が卒去していることが『日本紀略』によつて確認でき、おそらくはそれを受けているのであらうと考えられる。年始にもかかわらず、止まらぬ涙を詠み、悲嘆を吐露する歌である。能子哀傷の要素を認めるのであれば、正月にも関わらず、故人を思う悲しみで涙が止まらないことを詠んだ歌ということになる。

以上、管見の及ぶ範囲ではあるが『源氏物語』成立ごろまでの「新春の哀傷歌」を概観した。これら一連の和歌から、「こと忌み」の習慣にもかかわらず、年始を契機として哀傷歌が詠まれることがあつたことが伺える。また、正月の景物（初音、若菜、子の日の松）

を詠み哀傷歌とする例の他に、年の始めの悲しみそのこと自体を主題として詠まれた例も多く、先述した『源氏物語』の「新春の哀傷」の発想と重なる点が認められる。

四

「新春の哀傷」の特徴Ⅰとして挙げた、「新年を迎えても旧年からの悲しみは改まらない」という嘆きは、②定方詠、③兼輔詠、④貫之詠に、特徴的に詠まれている。ここでは特に、③「なく涙ふりにし年の衣手はあたらしきにもかはらざりけり」の、新しい年に「ふる（古・降る）」涙という詠まれ方に注目したい。③兼輔詠は、「葵」巻光源氏の贈歌に答えた大宮詠に引かれていることが指摘されており、発想と表現の類似と差異を検討しておきたいのである。

（源氏）あまた年今日あらためし色ごろもきては涙ぞふる心地する

えこそ思ひたまへしづめね」と聞こえたまへり。御返り、

（大宮）新しき年ともいはずふるものはふりぬる人の涙なりけり（②七九）

大宮詠は、「新春の哀傷」の特徴が表れている箇所（Ⅰ新年を迎えても変わらぬ悲しみを強調）として先に取り上げたが、新年にも関わらず悲しみが癒えないことを歌う発想の上でも、「ふる」の掛詞の表現の上でも③兼輔詠が踏まえられていることが伺える。ただし、兼輔詠では「古」は年に対して用いられているのに対して、大宮詠では悲嘆に暮れながらも新年を迎えてさらに一つ年をとった大宮自身を指している。これは、源氏が「古る心地」として葵上在世中のことを思い出していることと併せて考えた時、示唆的であらう。

「葵」巻の「新春の哀傷」で悲嘆に暮れる中心的人物は大宮と大臣であり、源氏は彼らと「哀傷」を共有しながらも、葵上のことは既に過去のこと（古る心地）と認識しているのである。源氏にとつて当該場面は葵上を哀傷する最後の場面であり、ここで悲しみに明確に区切りが付けられている。一方大宮詠は、「新年」に対して「古」を詠みながらも、③兼輔詠のように故人が亡くなった旧年を対照化していない点に留意したい。

「新年」―「古」を詠む「新春の哀傷歌」としては他に、④貫之詠「藤衣あたらしく立つ年なればふりにし人はなほや恋しき」があるが、この歌は亡くなった人を「古りにし人」とし、年が改まることによって亡き人との時間的な距離が遠くなったことを認識している。このような詠み方は、同じ貫之の大晦日の哀傷歌「こふるまに年のくれなばなき人の別やいとどとほくなりなん」（後撰・一四二五）と同一の発想で、⑤徴子歌「忘むなれど今日しももののかなしきは年をへだつと思ふなりけり」にもその発想が引かれていると思われる。このように、「年を隔てて亡き人との距離を痛感する」という詠まれ方は、「新春の哀傷歌」の一系譜を形作っていくように思われるが、『源氏物語』にはこの発想はついに引かれることがないのである。新年を迎えて、故人が亡くなった日が遠ざかっていくという実感は、悲しみの表現の一方方法はあるけれども、大切な人の死を過ぎ去った出来事として捉えている点において、『源氏物語』の「新春の哀傷」にはなじみにくかったのかもしれない。

次に、『源氏物語』「新春の哀傷」のⅢとして指摘した、「こと忌み」の問題について考えたい。こと忌みについて言及される場合「こと忌み」の語が用いられる場合と、「葵」巻のように、新年なのに涙

をこらえられない、故人の話を持ち出さずにはいられないなどと「こと忌み」の語を用いずに叙述される場合とがある。「こと忌み」の語の初例と思われる用例は、『蜻蛉日記』中巻、安和元年正月の記事に見られる。

かくはかなながら、年たちかへる朝にはなりにけり、年ごろあやしく、世の人のする言忌などもせぬところなればや、かうはあらむとて、起きて、みざり出づるまに、「いづら、ここに」人々、「今年だにいかで言忌などして、世の中こころみむ」と言ふを聞きて……（一六九―七〇）⁹⁾

「こと忌み」がその最初の用例から、「こと忌み」が破られがちであることに関する言及であるように、「こと忌み」が意識され、言及される場合の多くが、「こと忌み」が破られる時もしくは、破らないまでも破りそうになる時であろうことが予測される。「こと忌み」が守れるのであれば、「こと忌み」について言及する必要はないからである。またもう一つ、新年の「こと忌み」の特徴として挙げられるのは、強い喪の意識を共有できる相手との和歌の贈答や会話においては、「こと忌み」が意識されにくいということである。

「新春の哀傷歌」（1）の保明親王に近仕した者同士の贈答や、（2）醍醐帝を亡くした定方と兼輔の贈答などでは、「こと忌み」への言及が見られないのである（もちろん、喪中の親族を弔問するために贈った歌④や、法会の場合⑤で「こと忌み」が意識されることはない）。「葵」巻で左大臣や大宮が「こと忌み」に言及するのも、源氏が左大臣たちと完全には悲しみを共有できないことを理解しているための、遠慮があるからだと思われる。

そのような「こと忌み」への意識があるからこそ、悲しみを強調

して表白する表現として、「こと忌み」は「新春の哀傷歌」の重要な系譜を形作っていると言えよう。「こと忌み」を破ることそのことを題材として歌った最も早い例である⑤「忌むなれど今日しもものかなしきは年をへだつと思ふなりけり」は、父亡き後の悲しみを一人抱えながら正月を迎えている微子の姿を想像させる。実際には、重明薨去の後、継母と重明哀傷の歌を交わしており悲しみを共有する相手がいたかに見えるが、その継母とは重明亡き後間もなく村上帝に召し出され寵愛を受けたと伝えられる藤原登子である(『大鏡』『栄花物語』)。登子と村上帝の関係がいつ始まったかは特定出来ないが、重明亡き後の微子の孤独と心細さは否定出来ないだろう。「こと忌み」の歌はそのような微子の置かれた状況を考える和理解されやすい。

しかしながら、この一首を、孤独で心細い微子の心情が素直に吐露されたものとして理解するだけでは不十分であると思われる。なぜなら、微子には父の喪中で里下がりしている間にも、極めて意欲的な「手習」(の体裁を取った贈歌)を詠作し、を村上帝に献上しているという積極的な和歌の作者としての一面があるからである。この一首には、「こと忌み」というそれまで誰も詠まなかった題材が詠まれており、そこに微子の作家としての姿を認めて良いだろう。微子が抱いた「こと忌み」を歌に詠む発想は、和泉式部によってより意識的・意欲的に受け継がれている。

一日、人の許に

⑦きく人やいはばゆゆしとおもふとてかすむ雲をみにのみぞみる

正月一日、人人の事いみしてもものいふをききて

⑨きく人の忌めばかけてもいはでおもふ心のうちはけふもわすれず

和泉の二首は共に「きく人」を想定し、「きく人」を憚って「こと忌み」を守るのだと述べながら、実際には「こと忌み」を破って宮を哀傷する和歌を詠み、さらに⑦の場合はその和歌を人に贈っているのである。また、⑨では「心には下行く水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」(古今六帖・二六四八)を引き、宮を忘れられない思いを心の中に留めておくことが、口に出して言うよりも勝っているのだ、としながらも、それを和歌に詠み残している点、注目される。二首がこのように、矛盾を内在させながら、その矛盾がおもしろさとなっているのは、この二首が和泉の悲しみの率直な吐露などではもとよりなく、正月の「こと忌み」という題材を使っているかに新しい歌を詠むかに腐心した和泉の力作であるからであろう。「感情の切実さや深さとともにやや過剰な強調があり、宮を哀傷する和泉の姿の背後に、その感傷を作品化することに意欲的な作家の姿も見えてきて、それが作者の人間としての、また作家としてのたくましさをふとのぞかせることになっている」といわれる、¹²「帥宮挽歌群」の中にあつて、宮を亡くした悲しみを正月という時空において効果的に表現する方法として、これ以前には微子歌にのみ詠まれていた「元日のこと忌み」が題材として選ばれたのだらうと思われる。

くわえて述べれば、和泉式部の「こと忌み」の歌二首は、正月のはなやかさから疎外されている和泉の姿をも効果的に歌っている。『源氏物語』『新春の哀傷』の特徴として挙げたⅡ「正月のよろこびを共有しようとする人々から疎外される人物の姿を描く」は、贈答された「新春の哀傷歌」や、弔問のために贈られた歌、法会の際の歌などには見られないものであった。和泉が「こと忌みする周囲」

を意識し、「こと忌みが出来ないでいる自分」と対比することで、正月のよるこびから疎外されている作者の様子が際やかに浮かび上がってくるのである。前述徴子⑤歌には、「きく人」は想定されていないが、「こと忌み」が詠まれることによって、周囲のはなやかさに同じえない徴子の孤独な心情を想像させる。和泉式部詠の場合、「こと忌み」する人々と同調できない孤独よりは、「こと忌み」が出来ないほど宮への思いが深いことを強調しているのが特徴である。

このように、和泉式部の「こと忌み」の歌は、「新春に哀傷すること」の特性を目一杯生かして悲しみを表白したものであるが、『源氏物語』に明確な引用の跡があるわけではなく、物語とほぼ同時代の作であることもあり、はっきりとした影響関係を論ずることは出来ない。しかしながら、徴子の⑤歌は確実に紫式部に享受されていたと考えられる。

む月の三日、うちよりいでて、ふるさとの、ただししのほかに、こよなうちりつもりあれまさりけるを、こといみもしあへず

あらためてけふしものかなしきは身のうさや又ものかはりぬる

(紫式部集・一〇五)

この歌は哀傷歌ではないが、詞書に「こと忌み」への言及があり、二句三句は徴子歌と全く同じであることから、明らかに徴子歌をひいたものであろう。詠作年代については諸説あり決しがたいが、夫亡き後出仕した式部が正月に里下がりして感じた寂寥を詠んだ歌である。『源氏物語』が「新春の哀傷」の場面に限らず、「こと忌み」へ強い関心を示し、周囲のはなやぎやよろこびから疎外された人々

を描く際に繰り返し用いるのは、物語に先行しては徴子と和泉式部しか詠んでいない「こと忌み」の歌を、式部も詠んでいることと関わりがあるのかもしれない。

結

以上、本稿では『源氏物語』に先行する「新春の哀傷歌」を可能な限り集め、物語の「新春の哀傷」に引き継がれた発想や表現の特徴について考察を試みた。『源氏物語』「新春の哀傷」に特徴的に描かれる作中人物たちの心情として挙げた、Ⅰ年が改まって悲しみは改まらない、Ⅱ正月をよろこぶ周囲に同調できない、Ⅲ正月の「こと忌み」が出来ない、といった発想は、『源氏物語』においてにわかに出てきたものではなく、物語に先行する哀傷歌や同時代の哀傷歌にも見られるものであった。直接的な影響関係が指摘出来ない例もあるが、『源氏物語』において「新春の哀傷」が見事に形象されたその背景には、「新春の哀傷歌」の世界における発想や表現の成熟があったのだと思われる。

注(1) 以下、和歌は『新編国歌大観』に拠っているが、私に漢字をあてた箇所がある。

- (2) 「賢木」巻、桐壺院国忌は「霜月の朝日ごろ」(②一二八)のこと。実際の崩御は、「院の御なやみ、神無月になりては、いと重くおはします」(②九五)と記述があつて朱雀帝の行幸があり、「日をかへて」(②九六)東宮と源氏が桐壺院に拝謁していることから、少なくとも十一月の二日以降のことだと考えられる。また、『栄花物語』で彰子が立后に先立つて退出することが、「かくて二月になりぬれば、一日ごろに出でさせた

まふ」とある。『栄花物語』の記述は史実と一致しない場合も多いが『御堂関白記』『権記』によれば、これは長保二年二月十日のこと。

- (3) 今西祐一郎「哀傷と死―源氏物語試論―」『国語国文』四八―八、一九七九・八

- (4) 掲出した「新春の哀傷歌」は、詞書・和歌の内容（年のはじめ）等の表現、正月の景物が詠み込まれるなど・関連する史料から、正月に詠まれた哀傷歌であることが明瞭なもののうち、和歌の詠みぶりからも正月の詠であることが理解される例に限った。例えば、先に挙げた「ふかくさの野辺の桜しころあらば今年ばかりはすみぞめにさけ」（古今・八三二）は「空蟬はからを見つともなぐさめつ深草の山煙だにたて」（同・八三一）と共に、基経葬送の後に詠まれた歌である（堀川の太政大臣身まかりける時に、深草の山にをさめてけるのちによりみける）。基経の薨去は寛平三年（八九一）一月十三日（『紀略』『扶桑略記』『公卿補任』等）で、二首は正月に詠まれたと思われるが、和歌の詠まれ方は、春一般の哀傷歌（八三二）・季節を限定しない哀傷歌（八三一）であり、正月の作であることが和歌に反映されているとは言えず、今回の考察の対象からは外した。また、「はは宮うせたまひての年返りて、あめふる日ひめ宮に聞こえし」の詞書を持つ『高光集』三番歌「ひねもすにふる春さめやいにしへをこふるたものしづくなるらん」のように、正月に詠まれた可能性が考えられるものの確証が得られないものも「新春の哀傷歌」とはしなかった。正月の悲しみを歌った歌で、「哀傷歌」であるかの特定が困難だった実頼集九九番歌を、参考として載せた。
- (5) 『兼輔集』（歌仙歌集本）では、②二句「けふやくれなば」。また③は「ふりにし床の衣手は」となっており、古くなつたのは「年」ではなく「床」になっている。

- (6) 当該歌の詞書には「又の年の正月一日」とする本文（歌仙歌集本）があり、より事情がわかりやすくなっている。

- (7) 木船重昭『師輔集・清慎公集注釈』（大学堂書店、一九九〇）・片桐洋一『小野宮実頼集・九條殿師輔集全釈』（風間書房、二〇〇二）も、当該歌を能士の死を踏まえた歌として理解している。

- (8) 死んだことになっている「手習」巻の浮舟が、往事を偲んで「我世になくて年隔たりぬるを、思ひ出づる人もあらむかしなど、思ひ出づる時も多から」と新年と旧年の「隔て」に思いをいたす場面はある（⑥三五五）。

- (9) 引用は『新日本古典文学全集』に拠った。

- (10) 工藤重矩「藤原兼輔伝考（三）」（『語文研究』三六、一九七四・二）は歌の詠みぶりや常に定方からよみかけることで贈答が行われていることから、「おそらく定方の方が悲しみはより深かった」としながら、「それでも自分（定方・稿者注）の悲しみを分かちあえるのは兼輔だと思っていたのであらう」と述べ、首肯される。

- (11) 『斎宮女御集』西本願寺本一八―三一番歌・一二〇―一二六番歌。この一連の「手習」について、近藤みゆき氏は「詠歌と構成歌の緻密な響きあい、構成への配慮さえ感じさせるそれは、さすが書きの集成などではもとよりなく、様式化・文芸化された「手習」の提示となり得いよう」と説明する。（「手習」考―斎宮女御・和泉式部から源氏物語へ―）『むらさき』四二二〇五・二二）

- (12) 増田繁夫「和泉式部集を読み解く 帥宮挽歌群」『国文学』三五―一二、一九九〇・一〇

- (13) 和泉式部が「こと忌み」し発言を慎む女房たちの物言いを聞いて、⑨歌を詠んだことは、発想としては八の宮亡き後の正月を盛り立てようとする女房たちに反発する「権本」巻の大君・中の君などと重なり興味深い。正月の「こと忌み」ではないが、「早蕨」巻、中の君の都移りの際に、門出を祝して「こと忌み」し、大君の話題を避ける女房たちに、中の君が反発を感じる場面（⑤三六三）もある。